

平成26年度 新潟市図画工作部 活動報告

部長 大矢 和子

1 研究主題 「感性を働かせて、自分の思いを表す子ども」 ～みることでつながる広がる表現活動～〔2年次〕

2 研究の概要

図画工作科を「ふだんの生活や社会に向けて役立つ」教科にするためには、「作品づくり」の教科から「形や色や材料とかわりながら、どう発想・構想していくか」「どのように技能を発揮していくか」「いかに感じとり味わい鑑賞していくか」という作品づくりの中で「資質や能力を培う」教科へと転換していかなければならない。技術的な指導に偏った実践や放任ともとれる実践では、作品の出来栄えでのみ評価してしまい、その結果、作品づくりの過程が軽視されてしまう。このような授業からの脱却を図りたい。

そこで、本研究では主題を「感性を働かせて、自分の思いを豊かに表す子ども」とし、このような姿を具現するため、作品をつくる過程での手立てを探っていくことにした。手立てとして「みる活動」を位置づけ、「新しい表現の構想や方法を獲得させるきっかけ」や「自分の表現を楽しんだり友達と交流しさらに新しい表現方法を試みたりする場」をどのように学習活動を取り入れるかを研究していった。

3 研究の実際

(1) 研究の内容

表現および鑑賞の活動において意図的に「みる活動」を位置付けることによって形や色の面白さや造形的な特徴に気付かせ、そこから得たイメージを表現や鑑賞の活動に生かす学習を展開する。「みる活動」が、感性を働かせるきっかけになり、豊かに自分の思いを表すための有効な手立てになるかどうか検証していく。

(2) 研究の方法

導入時の発想・構想の手がかりとなる「みる活動1」と交流活動としての「みる活動2」という二つの手立てを表現や鑑賞の活動に位置付けた授業実践を提案することを通して感性を働かせて自分の思いを豊かに表現することに有効かを検証する。

《実践1》 題材名 4年「ビー玉君の大冒険」 授業者 葛塚東小学校 澤田 信子 教諭

ビー玉を転がして遊ぶ楽しい仕組みを紙でつくとともに形や色、強度などを工夫してつくる活動を行った。授業者は、デジタル教科書を使い拡大し、仕組みや仕掛けを見つける活動させ、柱や壁などの試作品を示した。また、単元を通し、交流活動→作品作りという流れで子ども同士で作品をみ合う場を設けた。これらの「みる活動」を設けたことで積極的に作品づくりの課題を解決していく姿が促された。

《実践2》 題材名 5年「もう一人のわたし」授業者 笹口小学校 椎野 越子 教諭

初めて知った表現方法をもとに、自分の顔を色と形で表現していく活動を行った。授業者は、同じ作家の写実的な自画像と色や形が特徴的なインパクトのある自画像を対比して提示した。また、鑑賞では、グループ内で付箋に書いた感想を述べ合い、観点ごとに分類していった。これらの2つの「みる活動」により子どもたちは形や色の造形的な特徴に目を向けるとともに作品では体験したことのない表現に挑戦する姿が見られた。

《実践3》 題材名 2年「チョッキン!チョッキン!おはなしアート」授業者 金津小学校 伊與部 里香 教諭

白い紙をはさみでどんどん切り、偶然できた形からお話の絵に表す活動を行った。授業者は、実際に紙を切って「はさみのお散歩」をやってみせた。また、偶然できた形を隣の人と見合せて「見立て遊び」をさせた。これらの「みる活動」を通して、子どもたちは面白い切り方に気付くとともに、友だちの異なる見方に触発されながら制作した。

《実践4》 題材名 4年「うつしてみると ～かたがみをつくって～」授業者 五十嵐小学校 小林 郁美 教諭

うつし方を工夫して刷る活動を行った。授業者は、導入時に「参考作品をどのように作っているか」という視点で鑑賞させ、子どもたちの発言をカードを使い視覚的に整理した。さらに、参考作品を実演しながら、用具等の使い方のポイントを知らせた。また、授業の最後に「何色の何がいっぱいあるか」という視点で友だちの作品を鑑賞させた。子どもたちは、ステンシル版画のよさや楽しさをより深く理解することができた。

4 成果と課題

導入時・発想や構想のてがかりとなる「みる活動1」を行うことで、子どもたちは造形的要素について多くの気付きを持つとともに制作への期待や意欲をもつことができた。未知の表現であっても今までの表現に捕らわれることなく自己を表現する手助けとなっていた。また、つくりたい作品のイメージをもつことを容易にしていた。提示資料の見せ方については、発見する・比較する・違いを見つけるなどの方法をとることで検討しやすくなり多くの気付きを促したりすることができた。より効果的な資料の提示方法や提示の順番について検討していくことが課題である。

交流活動としての「みる活動2」を行うことで、子どもたちはより積極的・自発的に作品制作にのぞむ姿が促された。授業の最初に取り上げた実践では、作品が完成に近づくほど交流が活発になった。また、授業の最後にこの活動を取り入れた実践では、授業の途中に設定した方が子どもたちの気付きを作品に反映させることができたのではないかという意見が出された。その人数についてもより多くの人数での交流が有効ではないかという意見が出ている。授業・単元のどこに位置付けるか、どのような方法で交流をもつことが造形的な要素への気付きや自由な表現を促すことに有効か検討していくことが課題となる。